

四畳半にて

雪月彩夏

「なあ、これってやつぱり本物なのかな」

隣でテレビを見ている友人が、流れているVTRを見て呟いた。

「そんな訳ないだろ。どうせ見間違いかCGだよ」

「そうかなあ」

友人はぼさぼさにのびた髪をかき上げながら残念そうに唸る。俺は安い発泡酒を口に運びながら、同じくテレビの画面を眺めていた。『緊急放送！これがUFO映像だ！』なんて、九十年代のオカルト番組を思わせる特番。この友人はこの手のものが大好きなのだ。家にテレビがないというので安い発泡酒を手みやげに、俺の家に来てきたわけだ。

いくつかの素人が撮ったUFO映像の紹介が終わり、UFO研究家を名乗る聞いたこともない大学の教授がペラペラと解説を始めた。アダムスキー型がどうか、あの動きは従来の飛行技術では再現できないとか。

「なんかさ、こういうの聞いとると本物っぽく思えてこないか？」

「こないな」

友人は俺の不信心を嘆きながら、

「お前はさー、夢ってもんはないのかよー」

「夢って言ってもね。科学的に考えて、くるくる回る円盤が空飛んだりカクカク動いたりするのがあり得ないと思っただけだよ」

「でたよ、理系の理論。これだから理系はロマンがないんだよ。超能力とか予言とかUFOとか、ロマンじゃないかよ。この無限に広がる大宇宙には、もしかしたらそういう飛行技術があるかもしれないだろ」

「どうだかな。いくら広い宇宙でも同じ次元に存在する限りは物理法則には勝てない気がするんだが。」

「あ、俺にも酒くれよ」

「ほらよ」

友人が手みやげから自分の分を要求したので、俺はテーブルの上に目をやり利き手で自分の缶を持ったまま残りの手でテーブルから新しい缶を取り上げ、親切にもブルタブを開けて渡してやった。

テレビに視線を戻すと、司会者やゲストの芸人が専門家の解説に過剰に食いついて番組を盛り上げようと努力している。ご苦労なことだ。

「なあ、そういうえはお前、ゴールデンウィークどうするの？」

俺の問いに友人は、

「うん？ バイトかな。帰省するにはちよっと遠すぎるからなあ」

と、青い瞳でテレビに映ったカクカクと動く光を追いかけている。

「アメリカ、遠いもんない。お前、彼女とかいないの？結構格好いいのに」

友人は金髪に透き通った白い肌、背が高く顔は整っている。男の俺から見ても結構な美形なのだが、問題としては彼は身だしなみを整えるということをしない。そのせいで、せつかくのイケメンアメリカ人というステータスも台無しだし、女にももてないって訳だ。

「別に、女とか興味ないし。あ、その女が超能力者とか預言者だったら考えてやっても良いけど」

「こういうところも難ありだったな。」

発泡酒を口に運ぶ。缶が空いたので手で潰して適当に袋に放り込む。手みやげに友人が持ってきた発泡酒は六本。ビール袋の中にはつぶれた缶が五本、友人の手にある缶もちよつど空いた様子だ。

俺は冷蔵庫から買っておいだ発泡酒を取り出してぐつと飲む。

「あー、おもしろかったー」

友人は伸びをしてからふつと立ち上がって窓際に移動した。カーテンを少し開けて窓の外の星空を眺める。

「なんかさ、こうやって空見るとUFOとか見えそうないがしない？」

「しないないー」

友人はぼーっと星を眺めていると突然ばたばた慌てだして、申し訳程度にあるベランダに身を乗り出した。

「お、おい！」

「なんだよ。どうしたんだよ」

「ほら、あれ！ UFOだよ！ あの光！」

「流れ星なんかじゃないの？」

俺も友人の横から身を乗り出して、友人の指の先にある光を探す。

楕円形っぽい光が星と星の間をすーっと移動していく。一瞬流れ星にも見えたが、流れ星にしてはスピードが遅い。よく、目をこらしてみると、

「なんだよ、ただの宇宙船じゃないか」

「え、あ。ホントだ。ちえ。UFO見つけたと思ったのになー」

「がっかりするなよ。ない物はいくら探しても見つからないの」

俺は発泡酒をまた胃に流し込んでからテレビ画面に目を移した。横文字の名前のキャスターが首の痛そうな角度でカメラに向かって双子のニュースを伝えていた。

「そういえば、お前はゴルデンウィークどうするんだよ？ 彼女とでもデートか？」

友人が冷蔵庫から勝手に発泡酒を取り出してぐいぐい飲み始めていた。俺は少し声を大きくして、

「勝手に飲むなよ。それに俺に彼女がいないのはお前

「がよく知ってるだろ」

「そうだったそうだった」

「ゴールデンウィークは帰省かな」

「お前実家どこだっけ？」

「発泡酒をすごい勢いで空き缶に変えろと友人は俺の冷蔵庫からまた新しい缶を取り出した。」

「だから勝手に飲むな、って言ってるんだろ」

「友人は気にせず缶を開ける。俺は手に持っていた缶を開けてから、」

「実家？ 実家は火星だよ」

「八本の手足を駆使して友人の手元から発泡酒の缶を奪い返して一気に胃に流し込んだ。」

「お前、飲み過ぎだよ。もう全身真っ赤だぞ。まるでゆでダコだ」

「友人は性懲りもなく冷蔵庫から新しい缶を出しながら俺にそう言った。」